



希望の風に乗り、  
この広い大空に夢を託して

バルーンリリース  
3月10日 山上小学校で

情報紙 第120号 2025年 5月 1日

# UZU MAKI LIVE



編・集・後・記

春は出会いと別れの季節で、ごちらも新しい第一歩を踏み出す節目のときです。私も定年退職という大きな節目を迎えました。すーっと先にあることだと思っていたのに現実のものとなって、ふと自分を顧みてみると、確かに歳はとったが果たして相應の成長はしてきたのかと、何とも複雑な気持ちであります。希望に満ちて新たな門出を迎えられた若い皆さんには、自分の夢と希望を信じて頑張っていたきたいと、心からエールを送ります。●今年の春は暑かったり寒かったり、季節外れの雪や強風もあって混乱しました。各地で発生した山火事は、大きな傷跡を残しました。海外では異常気象による火事がニュースになっていましたが、まさか日本でもこんなに頻発するとは夢にも思いませんでした。遠い世界で起こっていることでも、ほんとは遠い所の話ではなく、同じ世界で起こっていることなんです。●アメリカではトランプの嵐が吹き荒れています。今後私たちのところにも影響が出てくるんじゃないかな。大地震や戦争…起こっては欲しくないけど、いろんなことに関心を持つこと、支えあうことが大事ななだと思えるようになってきました。少しくらいは成長してきたのかなあ。(t)



永源寺地域が登場する本・雑誌

永源寺図書館提供

『森のカフェと緑のレストラン 京都・滋賀』

ぴあ

緑の風が吹き抜け、小鳥のさえずりや川のせせらぎが聞こえる森の中のカフェ。そんな日常から離れ、ほっと一息つける京都・滋賀・福井のカフェを紹介した本。東近江市からは、コーヒー職人の淹れたコーヒーと、素材にこだわり焼き上げられたパンが味わえる「石窯パンと自家焙煎コーヒー つむぎ」、湖東地区にある農園カフェ「MIMOSA KITCHEN (ミモザキッチン)」が紹介されています。



『ぼくらの季節 Y・O牧場 夏と冬の日編』

岡崎善通 作/ポエムピース

とある牧場で同じ日に生まれた3頭の子牛の日常を描く、「Y・O牧場なかよしわんぱくトリオ」の2冊目の絵本。「あか」が思い出す夏の散歩の思い出と、「くろ」が思い出す冬の川での出来事のおはなしです。子どもの頃のなにげないけれど、大切な宝物のような日々が、あたたかな水彩画で描かれています。



笑顔のまち えいげんじ 啓発用のポスター完成

まちづくり協議会のえがお部会では、令和6年度事業として「笑顔のまち えいげんじ」のポスターを作製しました。

これからの永源寺を担っていただける永源寺中学校文化部の皆さんの協力を得て「笑顔で暮らせる思い」を描いていただき、素敵なポスターができあがりました。

このポスターを自治会、学校・園、公共施設、医療機関、金融機関など各所の協力により掲示し啓発していただけることになりました。

永源寺地区の皆さんが、互いに助け合い「笑顔いっぱい」のまちを目指していることを願っています。



まちの話題



手品と昭和歌謡で楽しむ ボランティアセンターのﾌﾟﾚ活動



2月15日、青野町集会所で永源寺地区ボランティアセンターﾌﾟﾚ活動が行われました。

ボランティアセンター活動は、地域のコミュニティを活性することで防災・防犯を推進し、いきいき楽しく助け合える永源寺をめざして、住めば都プラン推進会議と永源寺福祉の会が計画された活動です。

この日は、石谷町の山田英雄さんによる手品と昭和歌謡の催しがあり、和やかな雰囲気が進められました。休憩時には、えんがわ喫茶によるコーヒーのサービスもあり、参加された方は「楽しいひとときをありがとう」と言っておられました。

最強寒波 君ヶ畑で積雪80cm 超え 除雪排雪作業に市職員も応援



節分過ぎの2月8日～10日と、2月19日～20日にかけて、10年に一度といわれる最強寒波に見舞われ、大雪となりました。

断続的に降り続いた雪の影響で、平地部でも20～30cmの積雪、あまり報道されていませんが、君ヶ畑町では80cmを超える積雪となりました。

この大雪の影響で、国道421号は三重県への通行が遮断されたほか、市道蛭谷君ヶ畑線の一部で雪崩が発生し一時通行止めとなりました。また、10日と19日には、小中学校も臨時休校となりました。

君ヶ畑町と箕川町では、5日間で延べ46人の市職員が除雪および排雪作業に従事されました。

結成10周年「巴」～UZUMAKI～ 記念ライブ開催 森のアトリエで10年のあゆみ展



近江和太鼓団「巴」～UZUMAKI～は、2014年9月に発足し、東近江市を拠点に地域のお祭りやイベント出演、県内外の和太鼓チームとの交流など積極的に活動されており、現在は小学生から大人まで12人で練習に励んでおられます。

2024年で結成10周年を迎えられ、これを記念した演奏会が3月30日、永源寺コミュニティセンターで行われました。この日は、県内外から約130人の来場があり、力強い迫力のある和太鼓の演奏に魅了されていました。また、森のアトリエでは、10年のあゆみと題して、これまでの写真や衣装、楽器などの展示も行われました。(関連フォト8ページ)

姉妹のふる里で念願の「華展」 寺田礼子・西山紀久子・小百合三人展



3月23日から4月6日まで、永源寺図書館で、山上町出身の姉妹と娘さんの3人による絵画展「華展2025」が行われました。

華展には、姉の寺田礼子さんの水彩画や書、妹の西山紀久子さんの墨彩画と紀行絵本『おじょうさんどこいくの?』の原画、紀久子さんの娘、小百合さんの日本画など、会場いっぱい多くの作品が展示されました。期間中には多くの来館者があり、華やかな会場は、笑顔あふれる交流の場となりました。

次は、あなたが永源寺図書館で夢をかなえてみませんか。「永源寺図書館に行けば、誰かにつながる居場所がある」(楽楽ひろばから情報提供)

◆◆一般建設業◆◆一般貨物自動車運送事業◆◆産業廃棄物収集運搬事業◆◆中古車買取販売業◆◆

株式会社黒川建設



〒527-0214

滋賀県東近江市甲津畑町2423

☎0748-27-8070 ㊟0748-27-8078



# 永源寺地区 まちづくり フォーラム

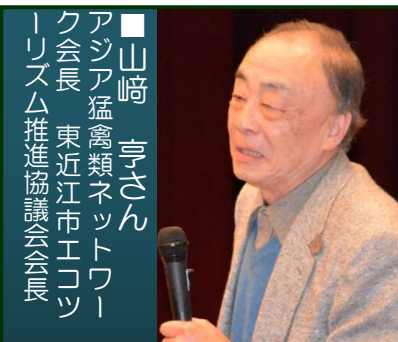
■基調提案  
鈴鹿の森の  
多様性と  
森の未来



関心の高いテーマで、フォーラムには約1000人が参加。



鈴鹿の森でのイヌワシとの出会いは、わたしの人生を変えてくれたといえる。イヌワシはまさに天狗である。なぜ、鈴鹿の森に天狗、イヌワシが棲息するのか。それは、木地師文化発祥の地であるように、古い時代から人々が豊かで多様な森林資源を糧に生活し、木材の収穫だけでなく、炭焼き、茅刈場など、生活に欠かせない資源を持続的に利用するため、山を賢明に管理活用されてきた。その結果、鈴鹿の森には人為的な開放地があちこちに存在し、森林資源を循環的に利用することの結果として、イヌワシをはじめ多種多様な生物が生息する場となった。日本有数の生物多様性を誇る森であるといえる。多様で豊かな鈴鹿の森は、木地師文化をはじめとする多様な森林文化を育んだだけでなく、広大な湖東平野を潤し、琵琶湖を養うことにより、あらゆる生き物と人をつなげ、東近江市特有の森里川湖の原風景を創造した、日本の森の存在意義の原点であるといえる。この素晴らしさを再生することは、私たちの責務であると考えている。



■山崎 亨さん  
アジア猛禽類ネットワーク会長 東近江市エコツアーリズム推進協議会会長

1976年3月24日、13:00。茨川の上流、標高1000mのところ初めてイヌワシを観測した。鈴鹿の森に引き込まれ、通い始めて約50年。人生を変えられたイヌワシとの出会いであるという。



東近江市には、源流から河口までつながる一つの水系、森里川湖のつながりがあり、鈴鹿の森は、市域全体を支える多様で豊かな生態系、自然資源の源である。また、鈴鹿の森には長い人と自然との関わりの中で育まれてきた文化があり、生物多様性という観点から、日本を代表するホットスポットになっている。鈴鹿の森の豊かさ、魅力を未来に引き継ぐには、多くの人が森に関心を持ち、森と人の共生に向けた新たな関わりを構築する必要がある。鈴鹿の森を生涯学習・社会教育の拠点として活用し、多様な人々をつなぐことは、地域や社会の課題の解決に向け、市民・企業・行政が共創する「リビング・ラボ」としての役割を果たすことにつながる。（リビング・ラボ：生活空間と実験室を組み合わせた造語。社会課題の解決や、新しい価値を生み出すために市民・企業・行政が「共創する」ことに軸を置いた方法論。現場でいるんなことを学ぶ。）



■深町 加津枝さん  
森の文化博物館基本計画策定委員会委員長 京都大学大学院准教授

風景や地域文化を研究。何度も現場に赴き撮り続けた奥永源寺の原風景を写真で紹介される。人と自然との関わり、自然の恵みを暮らしに生かし、暮らししてきた人たちが作ってきた風景を感じてほしいという。



博物館と言えば、資料を収集して保存し、研究して展示。講演会やワークショップなどで掘り下げて観ていただくのが活動の基礎であるが、2022年に博物館法が改正され、教育的要素に加え、文化経済戦略や観光振興、まちづくりの核としての役割が加わった。そしてこれらを実践することにより地域にとって有益な存在でなければならない。新しい博物館は、山がフィールドでリアルな体験ができることが大きなメリットであり、その学びを支える人材の育成と確保、地域の方とどのような関係性を築いていくかが最も重要な要素である。また、さまざまな研究場所としても期待できるが、研究された成果を地域のブランド、地域の誇りとなる取組が必要である。建築物も仏像も文化財の多くは木で作られている。木を知らないと文化財は成り立たないが、木と人々の暮らしが乖離している現実もあると思う。木の価値、木を育てている大切な山のことを学べる博物館を目指していただきたい。



■井上 ひろ美さん  
文化遺産プランニング代表（文化遺産キュレーター）  
京都国立博物館調査員

県教育委員会による大本山永源寺の文化財調査、『永源寺町史』の編さん・執筆にも関わる。滋賀県の文化財を全国の博物館などで展示公開されてきた。これからの博物館に求められる姿について提案される。

## 愛知川の清流を取り戻すために・・・ 「こんにちは！三日月です」

### 県知事と愛知川清流会の意見交換

愛知川清流会の皆さんと三日月滋賀県知事との懇談会「こんにちは！三日月です」が2月13日、永源寺コミュニティセンターで行われました。

「こんにちは！三日月です」は、先進的な取り組みや特色ある活動を行っている自治会、NPO、事業所、学校、団体などの皆さんを知事が訪問して対話する取組で、今回が知事就任以来90回目となります。

懇談会では、最初に活動内容を紹介。「子どもの頃の愛知川は清流が流れ、アユが飛び跳ね、白い

石がきらきらと輝いていた。そんなきれいな愛知川を取り戻したくを希望。年間10回実施している草木の伐採作業は、12年間事故ゼロで安全第一を基本としている。30分作業して20分休憩。この休憩時の対話が重要で、現役を引退した人が参加したいと思っていただけることを目標としている」と、毎月の清掃活動をはじめ、定期的に行っている水質調査や子どもの体験学習の場の提供、アユの煮付けを高齢者に配布していることなどを報告。

活動報告を聞いて知事は、「愛知川がアユの産地として優れていたところで、それを取り戻すために精力的に活動されており、何より事故ゼロが素晴らしい。水産面だけでなく多面的な効果が期待できる」と感想を述べられました。

意見交換では、山の荒廃と愛知川を取り巻く課題、その対策について話が交わされ、県からは試験的に始められた置き砂について説明。これは、ダム下流に上流の砂



意見交換のあとの記念撮影

利を置くことで、砂利が流れ石に付着した泥を削り取ることでできないかを試みるもの。内水面漁業振興協議会の議論の中から始まったものだと説明がありました。

最後に清流会から「全国のモデルとなるような取り組みをこれからも続けていきたい。そのためにも、発展的な協議会となるようお願いしたい」と話され、知事からは「気さくな話し合いで良かった。全県のモデル的な活動であり、あらゆる機会でもPRしていきたい。皆さんの活動が、より継続して充実できるように我々も頑張っつて対応していく。清流の日の活動には是非とも参加してみたい」と感想を述べられました。

熱心にメモを取りながら参加者の声を聞く三日月知事





# 永源寺地区 まちづくり フォーラム

## 森の文化博物館計画を議論

「鈴鹿の自然と新たな歴史文化の創造」をテーマとした「まちづくりフォーラム」が、2月23日、永源寺コミュニティセンターで行われました。

フォーラムでは、アジア猛禽類ネットワーク会長の山崎亨さん、森の文化博物館基本計画策定委員会委員長の深町加津枝さん、文化遺産プランニングの井上ひろ美さんの3人からの基調提案（6ページ参照）や、市が策定した森の文化博物館基本計画の説明が行われたあと、小椋正清東近江市長を交えてパネルディスカッションが行われました。

パネル討論では主に博物館計画について、参加された皆さんとパネラーがさまざまな意見を交わされました。

パネルディスカッション  
 ■コーディネーター  
 アジア猛禽類ネットワーク会長 山崎 亨 氏  
 ■パネリスト  
 東近江市長 小椋正清 氏  
 森の文化博物館基本計画策定委員会委員長 深町加津枝 氏  
 文化遺産プランニング代表 井上ひろ美 氏



参加者と意見のキャッチボール形式で行われたパネル討論

■参加者 イヌワシ、クマタカは今も生息するのが。道の駅から大きな鳥を見たことがあるが。

山崎 イヌワシは、残念ながら6年前にいななくなった。どうしたら戻って来るのか。それがまさに鈴鹿の森の活性化につながると思っている。現在はイヌワシを呼び戻す協議会を作って活動している。その再開けとして先週行ったイヌワシシンポジウムで東近江市長から、「ネイチャーポジティブ宣言」が行われた。鈴鹿の森は、日本に生息する猛禽類のほとんどが生息している貴重な場所である。道の駅の裏側の山の斜面は、広葉樹と針葉樹が入り混じってお



5回のフォーラム皆出席。思いを語る小椋市長。

り、クマタカが狩りをする格好の場所である。道の駅からクマタカを見ることができるようのも、フィールド博物館の強みのひとつである。

■参加者 フィールドを限定して指定した理由は。鈴鹿の森の全てをフィールドにしてほしいのでは。

山崎 指定された区域は、生物多様性と文化の多様性が凝縮したところで、安全性も含めて管理できる範囲を指定されたに過ぎない。鈴鹿の森全体が活性化していかねば意味がない。そのために、鈴鹿10座やエコツーリズムなど、さまざまな活動を通して場所で行っていく必要があると思っている。

深町 指定エリアは学習・体験の核となる場所で、鈴鹿の森のエントランス（入口）と理解していただきたい。地域の皆さんの持っている情報や経験が博物館に集まり、関わる人が増えていけば、必然

となって活動されており、すでに地域密着型の素地があるといえる。

■参加者 計画の推進にはマンパワーも必要とのことだが、人口減少が続いている。若者を呼び戻せるか不安に思っているが。

小椋 この計画を進めることで、人は呼び戻せると本気で思っている。人の幸せ、豊かさ、居場所って、いったい何だろう。人によって価値観は違うが田舎でクオリティ（質）の高い、豊かな生活ができる土壌が永源寺地域だけでなく東近江市にはある、そう信じてあらゆる政策を進めている。少子化の中でも、クオリティの高い地域を

目指せば人は戻って来ると信じている。

深町 知識を詰め込むだけが学習ではない。例えば、大雨時に川の水をコントロール（いなす）することも自然の中で人間が身につけてきたこと。地域で暮らしている中で、自然の恵みを暮らしに使いきれず学習能力が大事。これも豊かさである。便利な所に住まうこと、イコール豊かさではないと思う。

山崎 森里川湖のつながりの中で、鈴鹿の森は東近江市の心臓部であり、さまざまな恵みをわたしたちに与えてくれる貴重な存在である。だからこそ、鈴鹿の森全体がキャンパスであるといえる。

いる。それが森の力でもある。宿泊施設もあり、家族や学校で、自然の中で山遊びができる楽しいフィールドを作っていくきたい。

井上 博物館に必要なのは、リソース（資源）で、この中には人材も含まれる。永源寺地域には自然はもちろん、地域の人でしか知らない歴史文化など宝物がいっぱいある。地域の人が後押しする土壌もある。博物館は物静かに文化財を鑑賞するところというイメージを持っておられると思うが、最近では楽しい場所であるべきとの考えが主流である。行ってみて面白い、楽しい、やってみて新たな発

見がある、そんなフィールドを生かした機能と、全国的に貴重な歴史文化を紹介するという博物館本来の機能が融合することを目指していただきたい。そのためには、地域の人の関わりが欠かせないと思う。

山崎 地域との関わりという面では、東近江市では、百年の森づくりビジョンを策定する過程で、過去を振り返りながら将来どうするといったワークショップを地域の皆さんと行ってきた。森を学ぶだけでなく、森の再生のために自分たちが何ができるかを考える場になったかと思っている。また、鈴鹿10座やエコツーリズムを通じて地域の人たちが自ら主体

森の文化博物館基本計画を説明する西川寛さん

森に学び 共に生きる

企画部 政策推進課 森の文化博物館整備室

はじめに 2

地球規模での問題の多発

- 気候変動
- 自然災害
- 大気・水質汚染
- 生態系維持の危機

ネイチャーポジティブ (自然再創)

こうした考え方は…

- 私たちの地域では、普段の暮らしの中で行われてきた
- 先人たちは、資源を使用した後、次代のために再生してきた

社会経済活動が環境にダメージを与えている状態から、社会経済活動を維持しながら環境や生物多様性をポジティブ（プラスの状態）にしようとするもの

森林が危機的状況となっている

- 森と人との関係は疎遠となり、資源として利用されない
- 生物多様性、地球環境、土壌保全など森林の多面的機能の喪失
- 森林の経済価値低下、山間部の活力低下、人口流出

日本人は、自然に対し畏敬の念を持って接してきた。

- 森の恵みを巧みにいかにし、自然に感謝しながら、森と共に暮らしてきた
- 「ネイチャーポジティブ」の先駆者であると言える
- 木地師の生き方を通じて、日本社会のあり方、心の豊かさを学ぶべき

木地師

東近江市

- 日本遺産「琵琶湖とその水辺景観 -折りこむらしの水産産-」に認定
- 林業遺産「木地師文化発祥の地東近江市小椋谷」に認定
- 愛知川の集水域から琵琶湖まで一つの流域で完結するまち
- 森林を基に琵琶湖のつながりをいかにした総合的な政策を行うことができる

「東近江市だからできる、東近江市にしかできない」政策

自然と人が共生する社会のモデルとなる (仮称) 森の文化博物館

鈴鹿の森と (仮称) 森の文化博物館 3

東近江市の森里川湖の源流部

- 源流から河口まで一つの流域で完結するまち
- 先人は森里川湖のつながりの中で暮らしてきた

鈴鹿の森の自然と人

- 動植物の分布上、東日本と西日本の境界部に位置する
- 日本海側、太平洋側の両方の気候の特徴を併せ持つ地域
- 人が適度に開拓することにより、安定した生態系が維持されてきた

木地師文化をはじめとする森の文化

- 小椋谷を根拠地とする木地師文化
- 林業や薪炭業、政所茶
- 奥永源寺地域の山村景観

鈴鹿の森の変化

- 戦後復興による木材の乱獲
- 拡大造林による生物多様性の喪失
- 燃料革命による薪炭需要の激減
- 森林資源の経済価値の低迷
- 山間部から人口が流出し、活力低下

博物館の持つ「ちから」の活用が求められている

フィールド全体が「森の文化博物館」 4

今、運送の森は、人が過ぎかかったことにより、息づきを上げている

湖 川 里 森

フィールド全体が「森の文化博物館」 5

森の文化博物館

御池川の谷筋周辺は、鈴鹿の森を代表する地域資源が集まり、魅力が凝縮した地域

- クマタカを頂点とした森林生態系ピラミッド
- 木地師文化や山の暮らし、伝統行事
- 惟喬親王伝承
- 蓮谷山や吹上さき跡
- 鈴鹿10座 日本コバ、天狗堂
- モミ林やブナ林

鈴鹿の森の魅力が集約しているフィールドの様々な地域資源をまとめて博物館と捉える

- 森と人とのつながりを取り戻す
- 社会や地域の課題に取り組む

地域活性化 ひとづくり

環境保全 自然再興

観光振興 関係人口増加

伝統文化の継承

定住・移住促進